



三妻方城炭坑非常の歌  
 尊前田川、名も高き  
 三妻方城炭坑にて  
 坑内ガスが破裂して  
 八百余名の犠牲者を  
 出した哀れな非常  
 項は、大正三年の三月十五日  
 時も午前九時過ぎに  
 突然ガスが破裂して  
 天地も崩れる音共に  
 黒き煙りは坑口に  
 渦巻き下り噴き上る  
 これに驚き事務所は  
 スワコ平坑内非常だと  
 騒ぐその間もあはれそ  
 あまた坑夫や道狭しや  
 女や子供や老人が  
 気大いごとく泣きまわ  
 速く坑内の人々を  
 助けてくれと叫ぶ声は  
 突に哀れな限りなり  
 この時吉田坑長は  
 全部機械はもうまいて  
 ガスのかけんはおきられ  
 捜索入夫は処置なし  
 なれども坑内一面に  
 激しき破裂のその為  
 柱や柱はみな折れ  
 天井もしおが落ちて  
 崩れし断崖がたにつけ  
 死人や外傷人助けられ  
 助けられたる人々は  
 嬉しき涙であがりくる  
 あがれは子供や老人が  
 飛びつき共うれし泣き  
 死したる人は無残にも  
 手足がもげたり首が飛び  
 彩色や黒焦げで  
 体の崩れし人もある  
 見るも身のたがやだんにも  
 医師の検査も済んだら  
 白木の棺にいれられて  
 野辺の送りをする  
 唄 池本喜代蔵  
 昭和十一年十月五日

↑約40年頃前まで方城で唄われていた「方城非常唄」。炭鉱爆発事故の様子が事細かに伝わる歌詞で、かつて事故を目撃した池本喜代蔵さん(伊方)が生前、町の盆踊りで必ず口説いていました。時代の移り変わりとともに、いつしか途絶えていましたが、平成最後の夏、慰霊碑の前で唄が再現されたとき、犠牲者を弔うかのような花火が夜空を彩りました。

朝鮮人犠牲者にささげる演奏

昨年、旧産炭地の民俗学の研究で、福智町を訪れた際に大石さんと出会い、草刈りなど準備を手伝うようになりました。方城炭鉱では、朝鮮人も犠牲になったかもしれないと言われています。この地で朝鮮民謡を演奏できたことに深い意義を感じました。



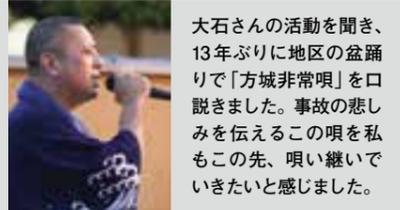
寄贈された提灯が飾られ露店が囲む中、バンド演奏や朝鮮民謡など様々なジャンルの音楽が山神の地に流れました。



7月の猛暑の中、手づくりでの櫓立ち上げ。



大非常犠牲者の供養を日々欠かさない  
富永 秀元 住職(福圓寺)



今夏「方城非常唄」を口説いた  
田丸 義雅さん(伊方)



雑草除去する前④と切り拓いた後の広場。

つながる思いが山神跡に

若者たちが企画した盆踊り大会は荒地の整備からのスタートでした。昨年の3月から草刈りを始めた大石さんは、山神社跡地周辺を毎日清掃している。迫本澄和さん(伊方)と出会います。迫本さんは「不法投棄が絶えない山神社跡、このままでは犠牲者の方に申し訳ない」と数年前から清掃活動を開始。この地を生かせる場所にしたいという共通の思いを胸に二人三脚の草刈り作業が始まりました。広大な土地に生い茂る人の背丈を越える雑草。その整備は途方もない作業でした。取り組みの趣旨を伝え、会員制交流サイト(SNS)のフェイスブックで有志を募ったところ、一人またひとりと大石さんの思いに共感して仲間が加わり、イベント3か月前には約20人から人々が駆けつけ、荒地地を切り拓くため、炎天下の中、人知れず多くの汗を流していたのです。

ゼロから切り拓く

合併後はじめて響く鼓動  
 「荒地地を生かしたい。方城の盆踊りを復活させたい。みんながつながる場所を創りたい。そして大非常のことを伝えていきたい」。一人の若者の熱い思いが仲間を呼びカタチになり、3町合併以降、途絶えていた方城地区の盆踊り大会を実現させたのです。

かつて、国や故郷を発展させてきた炭鉱。その影に多くの犠牲があったことを旧炭鉱町に住む私たちだからこそ決して忘れてはなりません。方城山神盆踊り大会は、過去と現在をつなぎ、地元の人が集う場として地域をつなぎ、そして「方城大非常」を風化させない行事として、未来をつないでいきます。

盆踊り大会の準備は、必要なものをそれぞれが持ち寄って整えられました。櫓は田んぼに放置されていたものを譲り受け、太鼓は有志から借用。特設ステージでは6組のアーティストが無償で出演。魅力的な10店の露店も集まり、祭りの舞台が創り出されました。

「ここで、とにかくやってみよう」。この言葉を胸に、若者たちは動き始めた。盆踊り大会復活を果たすまでの道のりをたどる。